

My Classroom Practices

英語授業実践記録

Vol. 3



P.2-5

ELEMENT English Communication I

4技能を統合した授業展開

～音読指導や付属CD-ROM活用について～

■新潟県立燕中等教育学校 西巻 裕樹 / 田中 研人

P.6-9

LANDMARK English Communication I

教科書を用いた多読授業の進め方

■矢谷学園鳥取城北高等学校 山根 正樹

P.10-13

LANDMARK English Communication I・II

教科書を読むだけでは終わらない授業展開

～情報・意見授受のある授業の構築～

■桐朋高等学校 中山 健一

P.14-16

Vision Quest English Expression I Advanced

文法事項のインプットから

発信活動へつなげる指導事例

■広島県立福山誠之館高等学校 永尾 昌栄

P.17-19

Vision Quest English Expression II

Vision Quest English Expression II

でいろいろなことをやってみた

■大阪府立天王寺高等学校 濱田 賢治

P.20-23

Vision Quest English Expression II

発信力を高める授業を目指して

■大分県立竹田高等学校 高橋 憲一

KEIRINKAN



4技能を統合した授業展開 ～音読指導や付属CD-ROM活用について～

新潟県立燕中等教育学校 西巻 裕樹 / 田中 研人

使用教科書: ELEMENT English Communication I

単位数: 4単位

使用副教材: 予習ノート, WORKBOOK Advanced

使用機器: デジタル教科書

はじめに

『ELEMENT English Communication I』を選んだのは、同僚より、指導に役立つ付属資料が豊富とのアドバイスがあったからである。本稿では、本校の実態に合わせた授業実践及び付属教材の活用を紹介する。実際のところ、年度当初からこの形式だったわけではなく、試行錯誤しながら常にマイナーチェンジを繰り返しながら授業を進めている状況である。

本校の現状について

本校は創立10年の県立中高一貫校で、各学年2学級である。4年生(高校1年生)では、10泊11日のオーストラリア海外研修を行っている。本校では各学年で英語を使った目標イベントを行っており、本稿の対象生徒である4年生は昨年度(中学3年次)、校内英語プレゼンテーション大会を行い、「日本文化紹介」のパワーポイントを作成して校内発表をした。このプレゼンテーションを手直しし、オーストラリア交流校で一人ひとりが日本文化のプレゼンテーションを行った。この海外研修の成果は、今年度、校内英語スピーチ大会で発表する。なお、次年度の英語イベントは校内英語ディベート大会である。

当学年でのねらい

後期課程(高校生)となり、また新課程が始まったことを受けて、授業では4技能をできるだけ使う機会を増やせるように工夫をし、基本、オールイングリッシュで授業を行っている。また、もう一人の4学年担当である講師、田中研人先生のアドバイスにより、「音読」を強調しながら授業を展開している。

指導の流れ

以下では、授業展開とともに副教材やハンドアウトなどの使用について紹介する。様々なことを試みすぎて、現在、少々煩雑になっているため、今後整理が必要である。

<使用教材・副教材>

①教科書 ②予習ノート ③WORKBOOK Advanced

<ハンドアウト>

④音読シート ⑤本文・フレーズ訳 ⑥ワークシート1 & 2 ⑦Dictationシート ⑧Summaryシート

(1) 予習

新しいレッスンやパートが始まる前に「②予習ノート」で予習を指示し、担当が不定期にチェックを行う。多くの生徒が「②予習ノート」をノート代わりに使用している。また、予習時の音読を課している。音声CDを使って、Listening > Repeating > Shadowing > Overlapping > Read & Look up などを行い、復習時の音読も含め、各パートを最低25回音読して、「④音読シート」に練習回数を記入させる。各レッスン終了後、「④音読シート」を提出させ、練習回数を確認している。しかし、自宅学習に任される部分が多く、生徒間での取り組みに差が大きいのが現状である。

Reading Sheet							
Class ()		No. ()	Name ()				
Lesson9 Gulliver's Travels Part 1							
Training variation	Check: How many times do you do the following training? Write down a circle(○) in a box						
①Listening	1	2	3	4	5	6	7
②Repeating	1	2	3	4	5	6	7
③Overlapping	1	2	3	4	5	6	7
④Reading aloud	1	2	3	4	5	6	7
⑤Shadowing	1	2	3	4	5	6	7
⑥Read & look-up	1	2	3	4	5	6	7
⑦J → E	1	2	3	4	5	6	7
⑧Dictation	1	2	3	4	5	6	7

(④Reading aloud 136w ÷ () s = () wpm)
【速読力の目安】 ~100 wpm = 初級 / 100~150 wpm = 中級 / 150 wpm ~ = 上級

④音読シート

(2) 授業

0. Warm-up

毎時間、授業の始まりに英語の歌を歌い、発音指導や異文化理解の一つとしている。「生徒とともに教員が楽しむ授業」が担当のモットーであるので、選曲は教員の好みのことが多く、仮定法がターゲットの文法事項

だった11月はEric Claptonの“Change the World”を歌い、12月はMariah Careyの“All I Want for Christmas Is You”を歌っている。歌好きな生徒たちなので、Warm-upにもってこいである。

1. レッスン全文 Reading

New Wordsの意味を簡単に確認にさせた上で全文を読み、「⑥ワークシート1」のQuestions(付属CD-ROM「授業用ハンドアウト」より)から10題程度に答えさせる(英問答)。ただし、時間がかかるためレッスンによつては行わないこともある。そのあと、「⑤本文・フレーズ訳」(付属CD-ROM「フレーズリーディング用本文+訳例」より)を配布する。以降はパートごとの流れである。

2. New Words

デジタル教科書(毎時間PC持参、プロジェクター使用)を使用する。デジタル教科書の「単語フラッシュカード」をプロジェクターで投影し、New Wordsの発音をチェックしたのち、「⑥ワークシート1」のVocabularyでNew Wordsの英語での意味を(付属CD-ROM「授業用ハンドアウト」より)確認する。

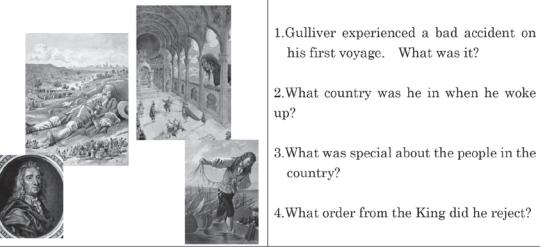
Lesson 9 Gulliver's Travels

Part 1

Vocabulary

- _____ = (n.) a long journey, usually on a ship
- _____ = (adj.) a long distance away [= distant]
- _____ = (n.) someone who works on a ship
- _____ = (v.) to attach something firmly to another object or surface
- _____ = (n.) a unit for measuring length [= 1/100 meter]
- _____ = (n.) the country against which your country is fighting in a war; an opponent in a quarrel, argument, or fight
- _____ = (adv.) when you do something that is known about by only a few people and kept hidden from others

Questions



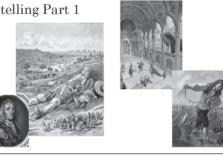
1. Gulliver experienced a bad accident on his first voyage. What was it?
 2. What country was he in when he woke up?
 3. What was special about the people in the country?
 4. What order from the King did he reject?

Gulliver had always wanted to () to faraway nations of the world. During his first voyage, he visited a country of () human beings. He made the King angry, so he left the country ().

⑥ワークシート1
(Teacher's Manual付属CD-ROM「授業用ハンドアウト」)

3. Listening > 音読 > 内容理解

引き続きデジタル教科書の音声を使い、Listening > Shadowing または Overlapping を行い、「⑥ワークシート2」(プレゼンテーションソフトでスライドも投影)の内容理解のQ&A(付属CD-ROM「Retelling用ワークシート」より)を行う。

Lesson 9 Story Retelling		[Questions]
Lesson 9 Retelling Part 1		1. Gulliver experienced a bad accident on his first voyage. What was it? 2. What country was he in when he woke up? 3. What was special about the people in the country? 4. What order from the King did he reject?
Lesson 9 Retelling Part 2		1. What did Gulliver see in the sky during another voyage? 2. How did the people there help him? 3. What was strange about their language use? 4. Why did he get bored?

⑥ワークシート2
(Teacher's Manual付属CD-ROM「Retelling用ワークシート」)

次に、Model Summary(付属CD-ROM「Retelling用ワークシート」のSummaryに文章を追加したもの)をスクリーンに投影し、「穴埋め音読」をして、生徒の理解度を確認する。

Part 2



Gulliver's ship was attacked by () during another trip. He was saved by people living on a () island. Oddly, people in this country used words from () to explain things, and they believed they had a special ability for (). He got tired of them and left the island because they were always playing ().

スライド1 Model Summary

その後、本文中の細かな重要事項を確認するため、プレゼンテーションソフトのスライドに英文と和文を貼り付け(付属CD-ROM「フレーズリーディング用本文+訳例」より)、重要な部分に下線を引き、ポイントなど書き込んだものを投影し、フレーズ音読をしながら簡単に重要な事項を解説する。プレゼンテーションソフトのおかげでテンポよく、板書の時間も節約できるため、音読活動やOutput活動に時間を割くことができている。ただし、生徒がメモする時間を確保することには留意している。

2
I began my first voyage
with some sailors /
on May 4, /
1699. //
On our way to the East
Indies, /
a big storm hit us. //
The wind shook our ship /
as if the ship were a leaf in
the wind. //
It drove our ship on to a
rock, /
which broke the ship in
half. //
=as if (仮定法過去)
まるで～かのように

私はいく人の船員たちと最
初の旅に出た
5月4日に
1699年。
shake
> shook
> shaken
東インド諸島に向かう途中で
大きな嵐が私たちを襲った。
風は私たちの船を揺さぶった
風に舞う木の葉のように。
風に煽られて船は岩に乗り上
げ
(岩に)ぶつかってまづぶた
つに壊れてしまった。

スライド2 本文・フレーズ訳(ポイント解説用)
※新出単語・表現は「赤」、重要表現は「青」、文法事項は「緑」で下線

4. Dictation

Listening・Writing技能強化のために年度途中より開始した。教科書などを閉じ、本文を4回ほど聞きながら、「⑦Dictationシート」(付属CD-ROM「ディクテーションシート」の選択肢を削除し、さらに空欄を増やしたもの)の空欄を埋めていく。生徒はやりがいを持って取り組んでいる。

Lesson 9 Gulliver's Travels

Part 3 ディクテーションシート () には1語。下線部は複数語。

7 _____ a large country called Luggnagg, I met a () who could take me to _____ called Japan. I _____ them, because I knew there were a lot of Dutch () there who could take me back to England. I asked the Luggnagg King _____ to the Japanese () for my safety, and he was _____ for me. The first _____ after two weeks was Xamoschi, a small town in the () part of Japan. We traveled () to the () called Yedo because I wanted to go to Nangasac ().

8 When I was introduced to the () of Japan, I asked if he _____ I wanted to go to Nangasac _____, so I asked him to excuse me from a special ceremony _____ a picture of Jesus or Mary, called *famie*. This was _____ Catholic because the () didn't like their (). Thanks to the () letter that I brought from Luggnagg, I could _____ that ceremony. On _____, 1709, I arrived at Nangasac and left for my country.

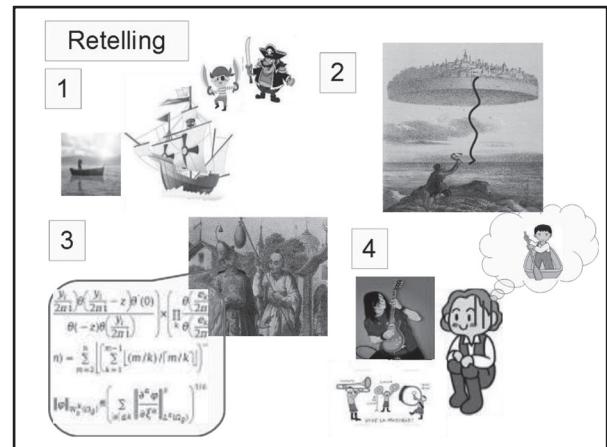
⑦Dictationシート

5. Retelling

OverlappingもしくはShadowingをして、再度Model Summaryのスライドの文章を穴埋め音読させ、個々のRetelling準備の時間を2~3分ほど与える。書いて準備するか、書かずに準備するかは生徒に任せている。黒板には新出単語やキーワードとなる単語をいくつかヒントとして書き出し、スクリーンにはパートの内容の流れをイメージさせる写真や絵(付属CD-ROM「写真の解説」やインターネットからの無料イラストを利用)を投影し、それを描写しながらRetellingを行えるようにしている。

3~4人のグループに分け、教科書や予習ノート、メモなどを見ずに、グループ内発表をさせる。その後、時間の余裕を見てグループ代表が発表をする。その際、教員は個々の発表に英語でコメントをする。生徒によっては本文から文を引用して暗唱する者もいたが、レッスンが進むにつれて、自分なりに文を簡略化したり、果敢にパラフレーズに挑戦したりする生徒が増えてきた。(レッスンによってはRetellingでなく、登場人物になりきってインタビュー形式のOutput活動をしたこともある。)

Retelling(Oral Summary)は授業に必ず組み込みたい活動だったので、その進め方も試行錯誤してきた。当初はじっくり時間をかけて、記述での要約をさせてからのRetellingや、Questionに答えながらのRetellingなど様々な試みをしたすえ、現在のこのやり方に落ち着いている。



スライド3 Retelling用イラスト

(3) 復習

自宅学習として音読(できるだけ毎日行うよう指導)とWORKBOOKを課している。また、各レッスン終了時に「⑧Summaryシート」(付属CD-ROM「Retelling用ワークシート」より)を配布して、自宅学習で英語の要約文を書くよう指示し、提出させている。ここでもレッスンが進むにつれ、各段落の主題文をピックアップすることに慣れ、パラフレーズに挑戦する生徒が増えてきた。また折に触れ、Shadowingテストをして生徒の音読の成果を評価している。

Lesson 9**Writing Activity**

以下の段落構成で、100～150語程度の文章を、本文を参考にして書いてみよう。

第1段落（序論）

Gulliver の自己紹介と Lilliput への旅とそこでの体験（30～50語程度）

第2段落（本論）

Laputa と Japan での体験（40～60語程度）

第3段落（結論）

馬の支配する国と母国での晩年の様子（30～50語程度）

⑧Summaryシート
(Teacher's Manual 付属CD-ROM「Retelling用ワークシート」)

最後に

ELEMENT E.C. I は付属CD-ROMの資料が豊富なため、教材の作成の時間を節約でき、ほかの指導に力を入れることができた。しかし、我々の利用方法がまだ煩雑である。ELEMENT E.C. II の使用もすでに決まっているため、さらに精選・工夫して活用していきたい。

また、「音読」活動を強調しているが、自宅学習としての「音読」が定着していないところが課題である。生徒がその効果に実感を持って取り組めるよう、さらに指導を工夫していかなければならない。授業展開にしても、はたしてこれが効果的なのか実施前にはわからず、試行錯誤（というよりは右往左往）しながら進めている。

英語を「コミュニケーションのための道具・技術」と考え、できるだけ「座学」中心の授業から「実習」の機会をさらに増やす授業にしてきたいと考えている。よきアドバイスがありましたら、nisimaki.hiroki@nein.ed.jpまでお願いします。

教科書採用決定後、著作者に大学院時代に指導いただいた卯城祐司先生、研究会でお世話になったレパー・マリ先生のお名前を発見し、驚いたとともに、さらに緊張感を持ってこの教科書を使用している。

（文責 西巻）



西巻 裕樹

HIROKI NISHIMAKI

筑波大学大学院教育研究科修士課程修了。教員歴14年目。趣味はギター、ベースギター、読書。



田中 研人

KENTO TANAKA

新潟大学大学院人文学部-同大学大学院教育研究科修了。中1から高3までの指導を通じ、下位から上位レベルの生徒をそれぞれ意識した授業づくりに奮闘している。趣味は釣り。暇があれば、魚と格闘している。



教科書を用いた多読授業の進め方

矢谷学園鳥取城北高等学校 山根 正樹

使用教科書: LANDMARK English Communication I

単位数: 4単位

使用副教材: 音声CD

はじめに

「中学校までは英語が得意だったのに、高校になったら急に難しくなって、なかなかついていけません。」こんな感想をよく耳にする。なぜそんなことになるのか不思議に思って詳しく聞いてみると、英文が長すぎて読めないという。なるほど、中学校の教科書を手に取ってみると文字も大きく、1レッスンをパソコンで打ってみると3～4行であった。もし仮に中学校で教科書だけしか英語を読んでいない場合、高校の教科書の英文の量を見て戸惑うのは当然だろう。では、そのような高校1年生がその先に迎えるゴールはどこだろう。仮にそのゴールをセンター試験だとしてみよう。センター試験はご存じのとおり受験時間は80分で、第3問から第6問までが英文を読んで解答する問題になっている。第1～2問を15分で解いたとしても、あの量の英文を65分で読む力が最低でも必要だ。つまり、スピードが求められている。その力をつけるための経験がごく一般的な高校生には圧倒的に足りないということを、教える側は常に頭に入れておくべきではないだろうか。

1レッスンを何時間で終わるのか

本校はコミュニケーション英語Iが週4時間、英語表現Iが週2時間ある。従来では、1レッスンを1か月かけて終わらせていた。しかし、よく考えてみるとそれは過剰に時間をかけているように思われる。なぜなら実際のセンター試験や大学入試では、1レッスン分の英文を15分～20分程度で読まなければいけないからだ。だから本当は1レッスンを1時間で終わらせるのが理想といえる。実際は難しいが、できるだけ1レッスンを早く終え、もっと英語を読む・聞く・書く・話す機会を生徒に提供すべきだと考える。今回、私はLesson 9 Space Elevatorを5時間で終わらせた。

具体的指導について

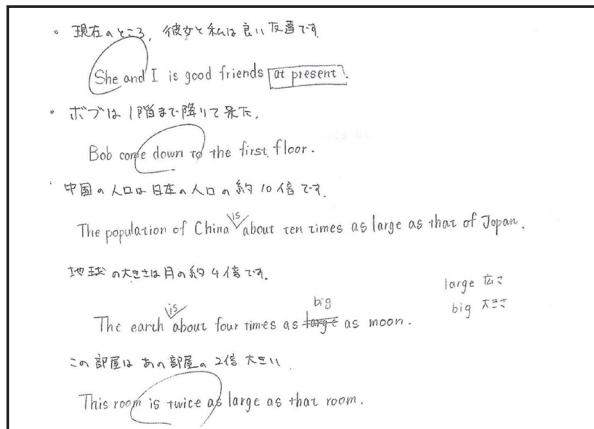
① 1時間目

まずは各レッスンの最初のページにある挿絵を見ながら、Activatorの質問を中心にOral Introductionから始める。“How do we get to space?”とクラスに投げかけてみると“Space shuttle.”という声があがる。(実際、スペースエレベーターの写真もスペースシャトルだと勘違いしている生徒もいた。)“On a space shuttle!”と言って、次の“Would you like to take a trip to space?”という質問を生徒に投げかけ、ペアで話し合わせた。そのあと、何人かの生徒に発表してもらったが、意外にも宇宙へ行きたくないという意見が多く、それは“Space is dangerous.”という理由からだった。ちなみに行きたいという生徒の理由は“I want to look at the earth from space.”であった。

次に、Part 1～2の新出単語をプリントにして、現段階で知っている語の意味を書かせる。新出なので出来は期待しないが、ほかの生徒が書いていると、焦りを感じる生徒もいる。それも狙いの一つだ。学年で持っている単語帳を一生懸命覚えている生徒は結構書けていた。その後、各自で単語の意味を確認し、音声CDで単語を聞いて、声に出して読む。単語は必ず音で頭に入れるようにしている。そうしなければ、リスニングの時に役に立たないからだ。

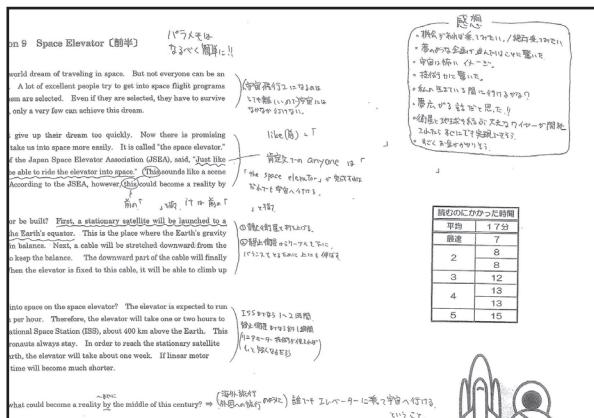
① 回目		
1	extrêmement	非常に
2	st��el	鉄鋼
3	m��t��ri��al	
4	d��velop��ment	
5	potential	
6	carbon dioxide	CO ₂
7	��nanotube	ナノチューブ
8	exist	
9	thick ↔ thin	
10	tiny	
11	��researcher	人
12	��production	生産
13	rok��t	
14	huge	
15	fossil fuel	
16	energy-saving	省エネの

最後に、先ほど確認した熟語と押さえておきたい項目を英作文で確認する。熟語は教科書の下に記載されている例文を利用した。ちなみに、例文は『Longman 現代英英辞典』から拝借することもある。英作文をさせ、解答を配って採点は各自で行い、質問があれば受け付ける。今回は、「in the endは必ず文頭にくるのですか。」という質問があったので、「<前置詞+名詞>の塊だから、副詞と同じ扱いで文末や文中にくることもある」と答えた。



② 2 時間目

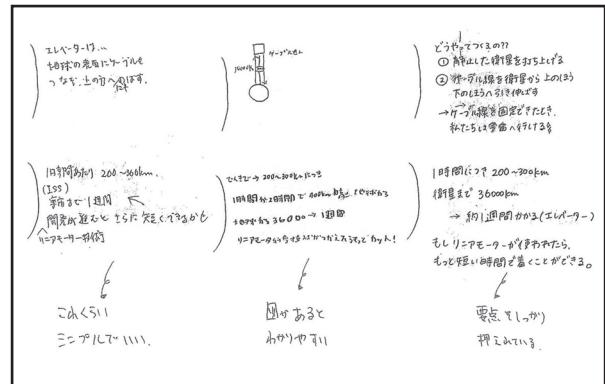
最初に、前回行ったPart 1～2の新出単熟語プリントと英作文プリントを配り、復習する。2回目なのでそんなに時間はかかるない。続いて、Part 1～2を1枚にしたプリントを配り、英文を読んでもらう。決まり事は2つだけ。まずは、段落ごとに簡単なメモを取って最後まで読む。このメモのことを「パラグラフメモ」と呼んでいる。読み終わったら自分が読むのに何分かかったのかを記入する。これは早い段階から時間を気にする習慣をつけるためだ。



次に、設問に答えて、本文の感想を書く。設問は教科書に載っているQuestionsを利用した。授業終了時にプリントを回収する。ポイントは設問を解きながら読むのではなく、まずは全体を諒りでしまうところにある。そう

することで概要を把握することに専念できる。パラグラフメモは簡単なメモなので、長く書こうとする生徒がいれば注意する。長いメモでは本文の全訳と変わりがなく、読むスピードも遅くなり、こちらが意図していること違うからだ。

その後、教員が回収したプリントの採点をし、間違つていればどこで間違ったのかをチェックして解答を作る。パラグラフメモは大きく間違っていない限り、直すことはしない。その代わり、うまく出来ている生徒5名分のメモをコピーし配布する。ただし、毎回同じ生徒にならないように配慮する。選ばれると生徒は嬉しそうだ。



最後に、読むのにかかった時間のクラス平均と、早く読めた順番に5位までのタイムを書く。競争意識が少しでも芽生えれば目的が達成されることになる。

③ 3時間目

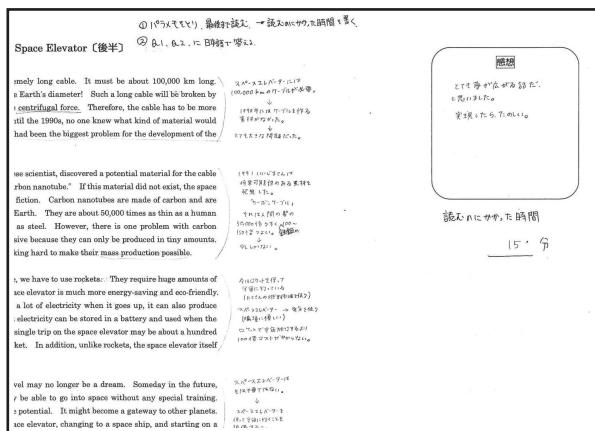
回収したプリントを返却し, みんなでほかの生徒のパラグラフメモや感想のまとめを見る。設問の解説も作ってあるので配布し, 各自で確認する。Common errorsがあれば全体で扱う。次に, 1時間目と同じようにPart 3 ~4の新出単熟語のチェックを行う。今回は, Lesson 9のターゲット文法事項である, 比較の倍数表現と仮定法過去を英語表現 I で扱っていなかったので, その2項目を教え, 一緒に英作文をさせる。仮定法過去は1年生にとって初めての概念なので補足プリントを宿題にする。



④ 4時間目

最初に、前回行ったPart 3～4の新出単熟語プリントと英作文プリントを配り、復習する。倍数表現と仮定法過去の英作文もあるため、少し量が多いが、前回と同じ問題なので、そこまで時間はかからなかった。次に、2時間目と同じようにPart 3～4を1枚にしたプリントを配り、パラグラフメモを取りながら、最後まで読んでかかった時間を記入する。その後、設問に答えさせ、授業終了時に回収して、教員が採点をする。

最初はパラグラフメモを取って最後まで読むのが好きではなかった生徒も、回数を重ねるごとに慣れてくる。そうすることで読むスピードも徐々に上がってくる。そうすると結果的に授業のスピードも上がり、やりやすくなる。



⑤ 5時間目

3時間目の授業と同様に、回収したプリントを返却し、みんなでほかの生徒のパラグラフメモや感想のまとめを見る。設問の解説も作ってあるので配布して、各自で確認する。

今回のレッスンでは、英作文をPost-Reading活動に設定した。テーマは「もし宇宙に行ったら何がしたいか」で、書き出しを “If you went into space,” とした。このテーマにした理由は、仮定法と直説法の区別をつけてほしかったからだ。

以前、あるクラスで2010年東大前期の英作文 (“If there were only one language in the world,” で始まる。) をさせたところ、従属節に注目して、主節には would/could を使うが、そのあとの文章は、現在形や過去形など好き勝手な時制を使う生徒がほとんどであった。当然、「世界に言語が1つしかなかったら…」という仮定が前提の文はすべて仮定法で書くべきで、そうでなければ直説法を使えばいい。この経験から、今回の題材はその練習をするのに最適だと考えた。英作文を書か

せる前に、「もし自分が宇宙にいたら…」という仮定の下に成り立つ文はすべて仮定法を使い、現実世界にも当てはまることであれば直説法を使うようにとクラス全体に話をしてから、英作文を書かせた。当然、この話をしても、実際に書かせると、その区別ができるいない生徒も多くいたが、それを指摘することで生徒の理解も徐々に深まっていた。

さて、いきなり生徒に英作文を書くように言っても、なかなか書けない。その原因の一つはActive Vocabulary (実際に生徒がwriting/speakingで使える語彙) が乏しいからだ。また、書く内容が決まらず、じっとペンを握ったまま、プリントとにらめっこをする生徒も少なくない。それらを解消するために、まずはテーマを生徒に伝えたのち、各自で数分どんなことをしたいか考えさせた。そして、それぞれ考えた内容を言わせて、その英語を板書する。例えば、生徒が「無重力を楽しむ」と言えば、「無重力になる」を “become weightless” と前に書く。わからない表現は後回しにして、最後に和英辞典で調べて提示する。(今はスマートフォンやタブレットPCで使える様々な辞書アプリがあるので、それを使えばより楽になる。) そうすることで、まずは生徒の語彙へのストレスを減らす。また、みんなが様々な意見を出すので、アイデアが思い浮かばない人も他人の意見を聞くことで、書く内容の参考になり、スムーズに書き始められる。実際の試験では、自由英作文で書く内容をすぐに設定する必要があるので、その訓練にもなる。また、あらかじめそのテーマで使われる語彙一覧を配って英作文を書かせることも有効だ。このようにすると、英作文の添削がとても楽になる。

語彙を提示したのち、英作文を書かせ、授業終了時に集めて添削をする。添削方法は2つあり、全体を見て上手く書いていそななら、そのままALTにチェックをしてもらい、その後、日本人教員も目を通してチェックし、生徒に返却する。生徒は宿題で書き直しをしてくる。ALTは意味が通じさえすれば、文法・構造が多少間違っていても訂正しない傾向があるので、必ず日本人の教員も目を通す。

もし、最初の段階で全体を見てあまり上手く書いていなければ、まず日本人教員が添削して生徒へ返却し、宿題として書き直させる。その後、ALTにチェックしてもらい、生徒へ再度返却して、宿題で最終的な書き直しをさせる。その後、添削してもらったALTに特に良かったものを3～4つ選んでもらい、印刷して生徒へ配布する。

If I went into space, I would make friends with an alien being.

I speak Japanese but he ^{would} speaks languages that I've never heard so far. At first, we may be not able to understand each other. However, I believe that ^{we'd} get along with him every day while I spend everyday with him. If we ^{were} good friends, I'd like him to teach me culture about his hometown.

For example, he ^{would} teach me food that he eat everyday, clothes, ⁾ what his family structure, temperature, and building that there are in his rooms. So, I'll introduce him to my family. I'm ^{would be} very happy because I ^{would} broaden my friends' ^{mind}. Although this is my fiction, If it came true, I was very excited. By ^{would be} doing so, my life will be better than now.

WELL WRITER /
SEE OF VOCABULARY
(good)

⑥ 定期考查前

定期考查前には、時間があれば復習の時間を設けて、課末のComprehension, Vocabulary & Expressions, Grammarを解かせる。LANDMARKの付属CD-ROMに「見開きレイアウト本文」というデータがあり、Part 1～4までを1ページにまとめて提示することが出来るので、それを配布してComprehensionを解かせる。また、ディクテーションシートを利用して単語の再確認も行う。宿題にして済ませることもある。

最後に

1レッスンを5時間で終える目的は多読多聴である。教科書以外にも『Accel Reading』(啓林館)や英検の過去問を読ませたり、教科書のTips for Listening や

別教材を通じてリスニングをさせたり、英作文やスピーキングをどんどんさせたい。教科書+追加教材で生徒が英語に触れる機会を最大化したいのである。かつては一文一文、丁寧にじっくり時間をかけて教えていく授業を展開していた。今でも精読は大切だと思っているし、時にはそのような授業も行うが、それはバランスの問題だと思う。「木を見て森を見ない」ではないが、まずは英文を読むことへの抵抗をなくし、すばやく文章全体の概要を把握するために読むことに慣れるほうが大切だと考える。

啓林館ではウェブ上でシラバスの案〔3単位〕を掲載されている。そこを見てみるとLesson 9は7時間で終わるようになっていた。教科書はスピード感を持って進めたい。

乱暴な言い方に聞こえるかもしれないが、たとえ7～8割の理解でも多読させるほうが生徒へのメリットは大きいと考える。もちろん弊害もあるだろう。しかし、まずこうした指導を行うことで、生徒は各段階で求められている力を身につけていくのではないだろうか。



山根 正樹

MASAKI YAMANE

1981年生まれ。鳥取城北高等学校英語科主任。より良い英語教育の実践を目指し、生徒と格闘の毎日。最近は構造分析中心の授業から、多読多聴を重視する授業づくりを心掛けるようになった。その結果、1年生からでも英検2級を合格する生徒が出始め、今年の2～3年生の中には6月にある英検準1級にチャレンジする生徒も出てくるようになった。



教科書を読むだけでは終わらない授業展開 ～情報・意見授受のある授業の構築～

桐朋高等学校 中山 健一

使用教科書: LANDMARK English Communication I・II

単位数: 3単位

使用機器: CDプレーヤー

はじめに

現行の学習指導要領に合わせた教科書の採択に際し, 以下の基準で教科書の検討を行った。

- ・「教科書を教える」のではなく「教科書を使って言語活動ができる」授業展開が可能であるかどうか。
- ・教科書理解のハードルが極端に高くなく, 生徒たちが多くの部分を自分の力で理解することができ, 表現活動に時間を割くことができるものであるかどうか。
- ・生徒たちが自分の考えを持てるようなトピックを含んでいるものであるかどうか。

これらの基準は, 「読んで終わり」ではなく, 教科書で受け取った情報を自分の言葉で伝える, その情報に自分なりの解釈・評価を与え, 英語で表明できる授業を想定してのものである。生徒たちのレベルよりもやや上(いわゆる comprehensible input [= i + 1] = 理解可能なインプット)の難易度で, 生徒が取り込んで使用できそうな英文を求めた。こうした検討の結果, 基準を満たす『LANDMARK』を採用することになった。

授業展開

(1) 基本方針

高校生の発達段階を考え, 読んだ題材の内容を受けて自分の意見を英語で述べることを主な指導目標と設定している。そのために, まず, 日本語を使う必要性がない限り, 授業は英語で行っている。英語で授業を行うことにより, 生徒たちのインプット量を増やすことが期待できるからだ。また, 生徒たちが英語を使う場面をできる限り多くするようにしている。授業中に, 彼らが英語で意味交渉を含む言語活動をする場を提供するのだ。

(2) オーラルイントロダクション

生徒たちが教科書を読む前に, オーラルイントロダクション(Oral Introduction, 以下OI)を行う。英文を読む動機づけとして, 生徒たちとのインタラクションを通じて英文のトピックを紹介するのである。教科書を読めば

わかることよりはむしろ, 教科書に書かれていない情報を多く取り入れて短時間で行う。OIでは読むためのスキーマを与え, 読む目標となる質問を提示する。英文の内容について, 英語で簡単な議論をさせることもある。例えば, 『LANDMARK II』Lesson 3で話題となっている, セントバーナードを売るという提案について, "If you were one of the monks, would you sell your dogs?"と問い合わせ, 理由とともに自分の意見を述べさせる。このあと, 実際はどうであったか知ることを読みの目的とする。

『LANDMARK』には随所に英文理解の手助けとなる写真や図表が含まれている。これらをしばしばOIにおいて提示する。こうした視覚補助は生徒の英文理解の上で大きな手助けとなる。

(3) 黙読

OI後, 生徒たちは教科書本文を黙読する。OIで得たスキーマを手助けとし, 提示された質問について考える。黙読の際には, 生徒たちが「木を見て森を見ない」リーディングを行わないように心がけている。この目的のために『LANDMARK II』課末のQuick Reviewにある各パートの適切なタイトルを選ぶ問い(『LANDMARK I』では指導書に掲載)のようなものは有効である。各課末に用意されているレッスン全体の内容についてチャートを完成させる問題(Comprehension)も, 文章全体の趣旨をつかませるのに役立つ。

なお, 新出語が多い高校教科書を生徒たちがスムーズに読むことができるよう, 新出語ならびにターゲットとなっている文法については, レッスンを扱う一番始めに(OIよりも前に)導入をしてしまう。読んでいる時に辞書を引く回数が多いというのは読むという行為が中断されてしまい, あまり好ましくないと考え, こうした手順で行っている。

(4) 内容理解

本文を読む前に生徒たちに提示したものも交えて質問を投げかけ、本文の内容を英語で確認する。OI同様、教科書に書かれていない内容も積極的に質問に取り入れる。例えば、英文には書かれていない具体的なデータなどを紹介することで、生徒たちが英文をより深く理解できるようにする。まずは事実情報を把握できているかどうか確認する(fact-finding questions)。さらに、生徒たちには受動的な読み手ではなく、英文を通して書き手とのコミュニケーションを図る能動的な読み手になってほしいという思いから、推論質問(inferential questions)や評価質問(evaluation questions)も問いかける。

以下、具体例を紹介する。

○ 推論質問

本文には書かれていない内容を推測させる。

(教科書本文『LANDMARK I』Lesson 6: p.76)
"Everything for the good of the patients" is Dr. Fukushima's motto.

↓

(Question)

What do you think made Dr. Fukushima have this motto?

○ 評価質問

本文の内容に対して、自分の意見を求める。

(教科書本文『LANDMARK I』Lesson 8: p.107)
In August 2009, the YMCA returned the gold medal to Rusty.

↓

(Question)

What do you think about this decision of the YMCA?

推論質問や評価質問のように答えが1つに定まらない質問では、ペアワークやグループワークを積極的に行っていている。

加えて、生徒たちにより知的な読み手となってもらうために、批判的な読みを期待する質問を用意することもある。

(教科書本文『LANDMARK I』Lesson 9: p.119)

With the space elevator, space travel may no longer be a dream.

↓

(Question)

Do you think it is true? What do you think?

(5) インテイクを意識した活動

英語をきちんと音声として産出できるようにすることはもちろんのこと、教科書本文で使われる英語表現を身につけさせるためにも、意味理解の済んだ英文を様々な形で音読させる。英語表現を定着させるために「覚えなければ」という意識を生徒たちに持たせてしまうと、彼らにはこれが苦行となってしまう。きちんと読めるように音読をしているうちに、英語表現がじわじわ生徒たちに染み込んでいくことを期待している。

音読活動はchorus reading, buzz reading, individual reading, repeating, shadowingなど一般的に行われるものをできる限り多く行わせている。一方で、分量が増える高校教科書では音読に十分な時間を確保できないこともある。その際には、各パートの要約版(指導書収録「パート別Summary」も使用可能)を徹底的に音読させることもある。

(6) 読後の活動 ～アウトプット活動へ～

ここでの最大の目標は、教科書で使用される表現をそのまま使うだけ、あるいは暗唱することではない。生徒たちが自分の考えを英語で表現できるようにすることである。具体的には大きく分けて2種類の読後活動を行っている。

まずは教科書で読んだ内容を自分の言葉(英語)で他者に伝えるリテリングである。これは生徒たちに英語表現をインテイクさせる役割も果たす。はじめは、リテリングのヒントとなるキーワードや絵、図表をこちらが用意し、それを見ながらリテリングをさせる。課末(Comprehension)のチャートを見ながらリテリングさせることもできる。リテリングの活動に慣れてきたら、生徒たち自身にリテリングのためのメモを作らせる。自分自身の判断で英文の要点を伝えるのに必要な情報とそうでない情報を判断させて、リテリングに取り組ませる。

Lesson 3 Saint Bernard Dogs Summary

Class _____ No. _____ Name _____

(Part 1) Tell the content (the summary) of part 1 to your partner, looking at the chart below.

```

graph TD
    SBDSaintBernardDogs[Saint Bernard Dogs] --> SwissPeople[The Swiss people]
    SBDSaintBernardDogs --> Hospice[Great St. Bernard Hospice]
    SwissPeople --> affection[affection]
    Hospice --> name[name]
    SwissPeople --> watchdogs[watchdogs]
    SwissPeople --> rescueDogs[rescue dogs]
    watchdogs --> storms[storms / avalanches]
    rescueDogs --> smell[smell]
    rescueDogs --> people[people]
  
```

(Part 2 to 4) Make a chart which helps you tell the summary to others. Then, tell the content of Part 2, Part 3 and Part 4 to your partner. (Be careful not to include too much information!)

Landmark II Lesson 3 Saint Bernard Dogs Retelling用プリント例

もう1つの読後活動が、眞の意味でのアウトプットといえる、自分の意見を英語で表明する活動である。覚えたものを復元する活動でも、与えられた内容を伝える活動でもない。教科書の英文のトピックについて考える視点を生徒たちに提示して、生徒たちに自分の意見を考えさせる。こうすることで、生徒たちの表現力や思考力は高まり、彼らは理路整然と自分の意見を組み立てられるようになる。

自分の意見を英語で表明する活動は内容に応じて「話してから書く」場合と「書いてから話す」場合がある。比較的意見を組み立てやすいトピックの場合には、即興性を高める目的もあり、まずは自分の意見を話させる。一方で、ややじっくり考えさせたほうが生徒たちにとって取り組みやすいであろうと思われるトピックの場合は、まずじっくり書かせてことで自分の考えを整理させ、自分の意見を話させる。ただし、この場合でも「原稿を読み上げる」行為は禁止している。

ここで、『LANDMARK』を使用した活動例を紹介したい。例えば、『LANDMARK I』Lesson 7: Eco-tour in Yakushimaでは次のようなライティング課題を用意した。

The Yakushima eco-tour that we learned in Lesson 7 is just an example of many of what can be called eco-tours. There are many varieties of eco-tours all over the world as well as in Japan. Some people say eco-tours are meaningful, while others say that nature should remain untouched. **What do you think of eco-tours? Do you think we need more eco-tours around the world, or do you**

have negative feelings about them? Why? Be sure to include your own experience/episode to support your opinion. Write your essay based on your group discussion.

『LANDMARK II』Lesson 1: What's in a Name? でのアウトプット活動は次のとおりである。

Some Japanese parents name their children kira-kira names. (Look at the examples below.) What do you think about this?

e.g. 希星(きらら)	姫星(きてい)
火星(まあず)	泡姫(ありえる)
七音(どれみ)	希空(のあ)
新一(こなん)	光宙(ぴかちゅう)

教科書には日本人が意味や希望を込めて名前をつけることが紹介されている。こうした情報により、彼らは自分たちの名前の由来や意味を改めて考える機会となり、上記の課題に取り組む上で大きな手がかりを得たようである。

さらに、『LANDMARK I』ではすべてのレッスンを終えたところで、複数のレッスンに共通する話題である環境問題について改めて考えさせることもできたことを付記しておく。まず、投げ込み教材で1992年の環境サミットにおけるSevern Cullis-Suzuki氏のスピーチを扱った。その上で、『LANDMARK I』に掲載されている環境問題に関するレッスン(Lesson 4: Gorillas and Humans, Lesson 5: Biodiesel Adventure, Lesson 7: Eco-tour in Yakushima)を再度振り返らせながら、環境問題という大きなテーマについて現代の大人たちへの訴えをまとめさせた。こうした、レッスンを横でつなぐ活動ができたことも『LANDMARK』を使用した1つの利点であろう。

意見交換をさせる際にはペアワークやグループワークで行うことが多い。昨今、こうした形態での学習が注目を浴びているが、必然性のあるペアワークやグループワークになるよう心がけている。ペアで日本語を英語に訳す作業や、一方の音読をもう一方が聞いているだけ、あるいは聞き手のことをまったく意識せずに書いたものを読んでいるだけのものは、実のあるペアワークとは言いたがたい。それぞれに異なる考えをぶつけ合い、そして

そこから新たな視点に気がつき、他者の意見から自分を振り返り、最終的には自己変容が起こる。これを達成するために、ペアワークやグループワークを行う。そのためには教科書がそれに適した題材を用意できることが求められる。『LANDMARK』はこうした期待に応えていると思う。

おわりに

高校教科書の採択では、従来のただ難易度の高い教科書を選ぶことの弊害が指摘されている。昨今、学習者である生徒たちが言語活動を行うのに適した教科書を選択する必要性が様々な場面で語られるようになり、これまでの採択の方法が見直されてきている。生徒たちが取り込んで使用するのに適した英語であるか、という視点を改めて持つ必要があるであろう。そもそもSLA(第二言語習得:Second Language Acquisition)でいうところのインプット仮説^{*}を考えれば、読んで理解するのも苦しい題材は効果的なインプットではないといえるかもしれない。授業の目的と学習者の身の丈にあった教材を用意し、インタラクションを伴う言語活動の豊富な授業を行っていきたいと考えている。

授業の組み立てに際し、教科書の題材が生徒たちにとって面白くないものにならないように料理をするのが、英語教師の仕事であると考えている。教科書をただなぞるだけでは面白くない。教科書の題材を外の世界へ、生徒たちの世界へとつなげる。そして自分たちに関わりのあることだと感じさせ、彼らが思考し、創造性を發揮できる授業をつくりたい。そこには千差万別の発想があり、異なる発想を持つクラスメイトとの関わりが彼らを成長させていくと信じている。

※学習者の現在持っている言語能力より、少し難しめの言語を多く聞いたり読んだりしていれば、自然にアウトプットも出てくる。(白畠他, 1999, p. 144)

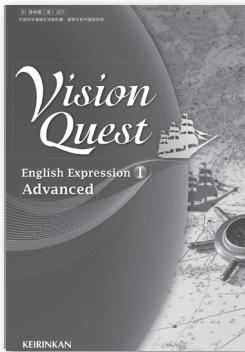
[「第二言語習得 (second language acquisition: SLA) に関する用語集(2009年8月更新)」
http://www.u.tsukuba.ac.jp/~ushiro.yuji.gn/Publishing/SLAglossary.htm#input_hypothesis より引用]



中山 健一

KENICHI NAKAYAMA

東京都北区生まれ。米国・Monterey Institute of International Studiesにて修士号取得(英語教授法)。著書に、『プログレッシブ中学英和辞典』(共著・小学館)等。趣味は旅行と読書。



文法事項のインプットから 発信活動へつなげる指導事例

広島県立福山誠之館高等学校 永尾 昌栄

使用教科書:Vision Quest English Expression I Advanced

単位数:2単位

使用副教材:WORKBOOK

はじめに

本校の1年次生は、40名のホームルーム2クラスを3展開という、習熟度別クラスで授業を行っている。1年次では、英語の基本的な力を持つことを目標に、コミュニケーション英語Iを3単位、英語表現Iを2単位、原則として、両方の科目を同じ教員が担当している。

入学直後に高校英語に慣れるためのガイダンスを行ったのち、4月中旬から本格的に教科書を使った授業に入る。1年次に文法を一通り網羅するようにシラバスを組んでおり、英語表現では、文法を知識として理解するだけでなく、その運用までできるようになることを念頭に授業内容を考えている。その方法として、文法解説や問題演習に加えて、ALTとのチームティーチング、及び、自由英作文やスピーチ原稿の作成、クラススピーチ、校内スピーチコンテストを実施して、発信型の授業を模索してきた。本稿は、筆者が2013年に行った授業実践を基に執筆したものである。

知識のコアづくり

文法指導に関しては、1つのレッスンを、"Grammar"のセクションごとに分けずに、一気に解説を行う。その際には、できる限り「公式」「鉄則」^{※1}にあてはめて、コアの知識をつける。その上で、教科書の例文にあたり、どの文法ルールが適用されているのかを考えながら、英文をインプットすることにしている。その後、例文の暗唱を行う。その際にも、グループ対抗ゲーム(Game the Bondなど^{※2})を取り入れて、楽しみながら覚えていく手法をとっている。

インプットが終わると、学んだ文法の知識を使って、口頭で短文を作る。ペアワークを活用して、時間内にできるだけ多くの英文を作る「タイムアタック」など、生徒同士で活動しながら、文法の知識を実際に活用する段階へ上げていく。

その後、教科書のExercisesを利用して問題演習に移る。さらには、ワークブックを使用して、知識の定着を図

り、応用問題に取り組むことで、入試への実戦力の養成も行っている。特に、Entrance Examのセクションでは、生徒がその場で問題に答えたあとで答えを提示し、その日のうちに自分で復習を行う。

次の授業では、グループに分かれて、1人ずつ1つの問題を解説していく。これは、ほかの生徒に解説することで、単に文法を暗記するのではなく、なぜこうなるのかを十分に理解することにつなげることを狙いとしている。教師は、机間巡回を行いながら、解説が正しくなされているかを確認する。また、グループ内でわからなかった問題については、そのほかのグループの代表者が、クラス全体に向かって解説を行うようにした。この「解説活動」は、生徒にとっても本当に理解をしていなければ、ほかの生徒を納得させられないため、とても意欲的な取り組みが見られた。教科書の該当レッスンで取り上げられていない文法事項については、参考書及びワークブックでカバーし、同じような手法で指導を行った。

活用のステージへ

文法事項の理解を終えると、次に、聞くこと、さらに話すことを主体とした発信学習に移行する。ここで、チームティーチングを活用して、学んだ文法事項を使った文を実際に活用する場面を作っている。教科書後半に記載してあるActivityを取り入れた1時間のチームティーチングを行う。その際も、単に楽しく英語を使うだけではなく、伸ばしたい力を設定し、生徒が個々に、ペアで、グループで積極的に英語を使って考え、発信する活動を取り入れるようにした。授業はすべて英語で(できるだけわかりやすい既習の表現を使って)行い、生徒が発話する場面を多く盛り込むように、指導案を作成している。また、1つの活動が複数の目的を持つように工夫をしている。「学んだことを生かし、考えながら取り組む」ことを念頭においた指導案になるよう、定期的に、ALTと指導内容について打ち合わせを行っている。実際の指導内容の例は、以下のようなものである。語法の誤用を

訂正する問題において、ALTが英文を読み、その正誤をグループで答えて、グループ対抗ゲームにする。このように、1つの活動が、文法理解、リスニングという複数の目的を持ち、かつ生徒同士で楽しく競える活動を入れるようにした。

また、助動詞を学ぶ課では、ペアで、学生のアルバイトや、携帯電話を校内で使用することの是非について意見交換をし、何語話したかをチェックする活動を行ったのち、発話した生徒から出題されるT/F Questionsに答えるという活動を行った。限られた時間内に意見をまとめ、論理立て、制限時間内にできるだけ多くの話をするという活動と、聞き手側のリスニング力の伸長を狙った。学んだ文法を正しく使い、かつ自分のパートナーよりも多く話そうという意欲を持って取り組んでいた。

Lesson Plan				
School:	Seishikan Senior High School			
Date:	August 29 th – September 5 th			
Class:	English Expressions 1			
Objectives:	Talking about summer vacation, review grammar point 'to+infinitive' and examine American culture through reading menus			
Time	Procedure	Teachers' Activities	Students' Activities	
5-10	Listening Quiz	JTE Play CD or role play with ALT	ALT Role play ALT	Take listening quiz
10	Warm-up What did you do on your summer vacation	Share what you did for summer vacation if you want to. Check that students use English.	Talk about trip to America. Get students into pairs and make sure they are using English.	After listening to what teachers did over summer vacation, students will get into pairs and take turns asking and telling what they did.
15	Grammar football	Score keeper, whenever a team answers right the player goes closer to their goal.	Draw a football field on the board, ask questions.	Classroom will be divided into teams of two. One member of each team will be asked a question, if they get it right the football player will move closer to the goal, if they get it wrong- no movement.
15	Reading the menu	Get students into pairs. Pass out worksheet and menus	Explain a menu to the class, where the restaurant name is, how a menu is organized, etc	In pairs, students will read the menu and decide what they would want to eat. Students will then ask their partner what they would get.

その後、課題として、その課で学んだ文法事項を使って、設定したテーマについて意見を書かせる指導を行った。旧課程では、2年次から「書くこと」の指導が、ライティングの授業を通して本格的に始まっていた。しかし、特に近年、「書くこと」への苦手意識を持つ生徒の割合が増えたこと、また、早くからの指導が、2年次以降の表現活動に大いに役に立つと考え、1年次から積極的に、学んだことを聞いたり話したりする活動を経た上で、書くことにまでつなげていっている。そうすることで、生徒が感じる表現活動に対するハードルを低くすることにつなげたいと考えており、これが本校の指導の特徴の1つかもしれない。

発信活動の指導例

英作文については、月に2本の割合で書かせ、添削のあとに返却する。その際に、優れた作品を提示するとともに、よく見られる間違いについて解説をするようにした。テーマも、最初は、自己紹介や好きなものの紹介といった、身近で取り組みやすいものから、社会問題を取り上げたもの、抽象度のやや高いものへと移行するようにした。語数も、30語から始めて、段階的に語数を増やしていく、1年次最後の課題では、80語を求めた。また、テーマ設定の際には、問題解決型・賛否型のように入試問題にも対応できるよう配慮している。

以下が、課題に使用したテーマの抜粋である。

- Write about a trip you took.
- What do you like about school life and why?
- What should you do to stay healthy?
- Which is more enjoyable, reading books or watching TV?
- Choose a Japanese historical figure, play, or event and describe it.
- Write about one of the biggest problems in Japan.
- Write an advertisement for Japan.

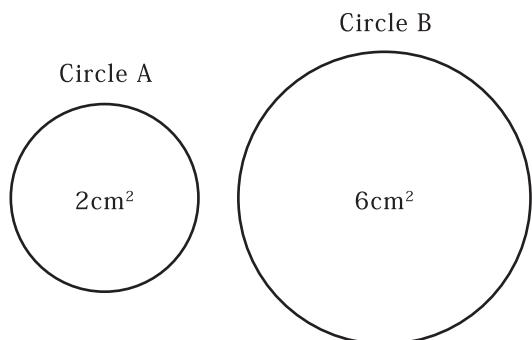
さらに、学期に2度、テーマに基づいてスピーチ原稿を作成したのち、クラスで発表を行うようにした。発表する生徒は、スピーチ原稿の内容・構成に加えて、発表時には、発音、リズム・イントネーション、ジェスチャーや、デリバリー（話し方）に注意を払いながら、いかに自分の主張を効果的に伝えるか奮闘していた。聞き手は、スピーカーの主張を聞いた上で、生徒自身がジャッジとなり、ベストスピーカーを選出する。リスニングの力をつけるだけでなく、ほかの生徒のスピーチを聞くことで、生徒自身の原稿の内容やスピーチの方法を洗練させるよい機会となった。さらに、2学期後半から、生徒は、1月に実施される校内スピーチコンテストに向けて、300語程度で“What Should We Do to Make Our Society Better?”というテーマで、問題解決型のスピーチ原稿を作成した。12月にクラスコンテストを実施して、各クラスから1名代表者を決め、代表7名が校内スピーチコンテストで発表を行った。また、授業を離れたところで、夏季休暇中には、外部の英作文コンテストのテーマに沿って、400～500語の英作文に挑戦した。さらに、外部のスピーチコンテストにも積極的に参加し、授業で学んだ表現力を生かす場を提供した。

考査問題作成においては、知識・理解を見るだけで

なく、絵や図を見て内容をとらえ、学んだ語法や表現を使って英文を作るという、思考力・判断力を見るという観点を取り入れた問題を入れた。

【出題例】

次の図のCircle Aの大きさについて説明しなさい。
このとき、Circle Bと比較して説明する一文を作りなさい。
ただし、Circle A … で始めること。



また、毎回、自由英作文を必ず課すようにした。語数も、1学期中間試験は30語、3学期学年末試験は75語まで、徐々にレベルを上げていった。その結果として、生徒は、英語を書くことに対して抵抗感が少なくなったと感想を述べている。

英語表現Ⅱでは、文法をさらに固めるとともに、「書くこと」「話すこと」にもさらに重点をおいた発信型の指導方法を継続していき、英語の運用力を高める一助となることを期待している。

※1:筆者が文法のルールをまとめたもので、啓林館ホームページの授業実践記録 (<http://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/koei/english/jissen/37.html>)に一例を載せさせていただいている。

※2:ペアが並ぶ列を複数つくり、最前列のペアが起立する。教師の言う日本語を英語に直したものを、わかり次第挙手して、ペアで声をそろえて言う。できたペアは着席し、次のペアが同様に行う。最も速く最後尾のペアまで到達できた列グループが勝者となる。



永尾 昌栄

MASAE NAGAO

広島県立福山誠之館高等学校指導教諭。平成18年度より広島県外国語エキスパート教員。平成21年度より広島県外国語指導教諭。平成19年度文部科学省優秀教員表彰。



Vision Quest English Expression II でいろいろなことをやってみた

大阪府立天王寺高等学校 濱田 賢治

使用教科書:Vision Quest English Expression II

単位数:2単位

使用副教材:Vision Quest 総合英語

はじめに

本校では第2学年で英語表現Ⅱを週2時間かけて行っている。また、そのうちの1時間は1クラスを2グループに分けた少人数展開の授業を実施しており、前期はNET(Native English Teacher:外国人英語教員)とのT.T(ティーム・ティーチング)を行った。

今回は当時、大阪府立天王寺高等学校に赴任して1年目の私が、Vision Quest English Expression Ⅱ(以下VQⅡ)を使って、2年生に実践したいいくつかの「簡単な仕掛け」を紹介したい。

授業に際して

本校は大阪府が指定するGLHS(グローバルリーダーズハイスクール「進学指導特色校」の略。)の10校の中の1校で、これから社会のリーダーとして活躍する人材を育成することを目標にしている。

実際、生徒の多くが東京大学や京都大学、大阪大学といった難関大学を第一志望にしており、我々英語科の教員は、徐々に変化しつつある大学入試問題を視野に入れながら、新教育課程を意識した4技能を使った授業(特に「英語表現」においては「書く」「話す」といった発信を主体とした授業)を展開する必要がある。VQⅡはこういった我々の使命を達成するのに最も適した教科書であると多くの英語科教員が考え、この教科書を選定した経緯がある。

Performerになる

英語教員になりたての頃、いや40代前半に至るまで約20年間の間、私はinstructorであった。授業前日に何時間もかけて予習したことを、英語も使用せず、早口の関西弁でどれだけまくしたてることができるか、それが私の役割だと思っていた。あるときには生徒の発言が一言もない授業もあった。しかし、私は生徒のうなづく顔を見て、自己満足に浸っていたものだった。

ところがある年の授業アンケートで「先生の授業は

色々なことを教えてもらって、わかった気になるんですけど、定期試験になると何も思い出せないんです。」というコメントをもらった。しかもそれは1名ではなかった。その時の私は

Input → Intake → Output

の流れを全く無視して授業を行っていたのだ。その時から私はinstructorからPerformerに変身しようと思った。生徒の自己表現の機会を増やし、私が教える時間を短くする(どうしても必要な時は補助プリントなどを使って補う)つまり、学習の環境づくりに主眼を置く授業者になろうと思ったのだ。VQⅡでは左ページのStudy Pointsなどを使っての転換練習やクイックレスポンスを行うことによって、生徒のOutputの機会を増やしている。

最初に黒板に書くこと

先生方は授業の一番初めに黒板に書かれることを決めておられるだろうか。私は必ず黒板の左上に

【 S + V 】

と書くことしている。そして、そこに必要に応じて数字を書いている。生徒に構文を意識させることが狙いだ。

例えば、Lesson 16で扱う「分詞構文」や「副詞・副詞句」では、下記のとおり数字を書く。

【 ① S + V 】

Lesson 1, 2で扱う「主語」の場合:

【 S + V 】
②

Lesson 12で扱う「助動詞」の場合:

【 S + ③ V 】

Lesson 8, 10で扱う「時制」「受動態」の場合:

【 S + V 】
④

Lesson 3~7で扱う最も重要な「動詞の語法」「5文型」の場合:

【 S + V ⑤ 】

つまり、生徒の頭の中にある、1年生でVQ I を使った時に習った文法事項を「頭の引き出し」にきちんと整理して入れてやりたいのである。一度引き出しが出来上がると、整理はしやすくなる。VQ II も特に前半部分はVQ I と同じく文法項目を意識して各Lessonが構成されているので、生徒たちに構文を意識させやすい。

Team Teaching

先生方はどのようにしてNETとT.Tを実践されているだろうか。私は以前の勤務校でもNETとT.T.で英作文の授業を教えた経験があるが、その時は生徒が黒板に書いた作文をNETが添削するだけであった。もちろんそれも大切な役割ではあるものの、あまりにもったいない。私は生徒の表現活動のために次の2つの事をNETに実践してもらった。

a. Shadowing / Quick response / Chorus reading

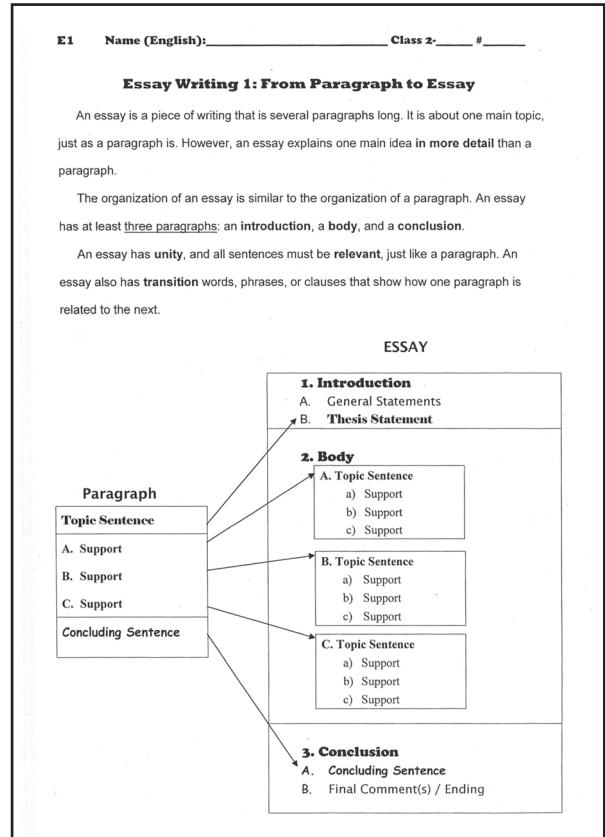
左ページのStudy Points の例文を生徒にしっかり身につけてほしいので、手を変え、品を変え、様々なアプローチを試みた。生徒は短文を短時間で何度も口ずさむのでintake(定着)していく。しかもネイティブの先生の英語を真似するので効果は絶大である。45分という短い時間で1つのLessonを完成させるのは容易なことではない。特に大学入試の和文英訳の観点から、右ページのExercises 3. は生徒から多くの質問が毎回飛び出るので、最も多くの時間を割きたい部分でもある。しかし、反面前述したようにinput, intakeなしではOutputはできない。そこでネイティブの先生に登場してもらって生徒の活動を助けてもらったのである。

b. ニュアンスの違いを説明してもらう

例えば、Lesson 8の<未来を表す表現>である「be going to / will / 現在進行形」の違いやLesson 11の「仮定法と直説法」の違い、細かなところではLesson 9 のA 5. の "... it has never been a success." を "... it has never been successful." に変えた場合、どのようなニュアンスの違いがあるのかなど、実際に生徒たちが間違いやすい部分、疑問に思う部分を英語で例文を出しながら説明してもらった。私はこの時間をNETの名前にちなんで“Ian Time”と名づけたが、生徒にはことのほか好評であった。

Essay Writingの指導

我々はこの2年生の英語表現活動のゴールをEssay Writingと定めた。最近の大学入試においては、英文和訳、さらには自由英作文の出題が増加傾向にあり、しかもその傾向はSGU(スーパーグローバル大学: 大学の国際競争力を高めるために、文部科学省が重点的に財政支援をする大学。2014年、全国国公私立大学37校が指定を受けた)の取り組みなどから考えても、変わることはないと考えることができる。しかも受験生は約10分から15分といった短い時間で、その問題に対応しなければならない。VQ II のExercises 3. の練習などによって短文を英語に直すことには慣れた生徒ではあるが、それをParagraph WritingやEssay Writing につなげることは容易なことではない。そこで我々はVQ II のPart 2を使って、生徒にParagraph WritingやEssay Writing の書き方を教えた。Brain stormingからTopic sentence 作成へ、そしてParagraphからEssayへ生徒は時間ごとに進化を遂げて、全員が課題であるEssay “The person I admire the most” を書き上げたのである。ちなみにOriginality(独創性): 15点、Neatness(正確さ): 5点、Grammar: 10点の配点で評価をした。以下のプリントは、Essay Writingを指導する際に私が使用した補助プリントである。前任校のNETが作成して、現在も使用している。



E2

An essay has three main parts:

1. Introduction (Introductory paragraph)-

A. General statements to attract your reader's attention.

B. Thesis statement to state your main idea.

◊ A thesis statement for an essay is like a **topic sentence** for a paragraph- it names the specific topic and gives the reader a general idea of the content of your essay.

2. Body-

- is at least one, but usually two or more paragraphs, depending on how many subtopics you want to discuss in the essay.
- each body paragraph discusses one subtopic of your main topic.
- contains as many paragraphs as you need to explain all subtopics.

3. Conclusion (Concluding paragraph)-

A. reminds the reader of what you said in your essay with a **concluding sentence** that restates the thesis statement in different words, or summarizes the subtopics of your essay.

B. includes final comments or thoughts about your topic that the reader will remember or think about.

✓ Since an essay is longer than a paragraph, you should make an **outline** to organize your ideas before you begin to write.

A3 Class # Name

2nd Term Assignment

☆Paragraph Writing

- 1) Write your class, number, and name in English.
- 2) Write more than 120 words.(Count the number of words.)
- 3) Write at least 3 supporting sentences.
- 3) **Highlight** the topic sentence.
- 4) Underline the supporting sentences with a red pen.
- 5) Underline the concluding sentence with a blue pen.
- 6) Circle transition signals with a red pen.
- 7) Circle the concluding signal with a blue pen.

★Hand it in BEFORE Monday July 5th★

*If you are late → Hall the score!

*There is a box in front of the staff room. Put your assignment in the box. Don't be late!!!

Topic What were you most impressed with in Malaysia?

School Trip in Malaysia

Word Count words

ESSAY WRITING

Paragraph Writing Clear your desk, and write as much/fast as you can.
*Write 3 Supporting Sentences.

Topic _____

Topic: _____

Thesis statement: _____

Subtopic A: _____

Example 1: _____
Example 2: _____

Subtopic B: _____

Example 1: _____
Example 2: _____

Subtopic C: _____

Example 1: _____
Example 2: _____

**Check your partner's writing.
Word count/ check Spelling and Grammar and check list

Check List

1. A Topic Sentence 4. a Concluding Signal
2. 3 Transition Signals 5. a Concluding Sentence
3. 3 Supporting Sentences 6. Indent?
7. Correct format? (No 2 off)

Let's start to write an essay next week!!

おわりに

私の授業は試行錯誤の連続である。おそらくこの年齢になっても成功よりも失敗のほうが多いような気がするが、そのひとつひとつが日々の授業改善に少しずつつながっているようにも思われる。「難関大学の入試に対応」でき、かつ「使える英語」を生徒に身につけてもらうために、どの方法が一番良いのか答えはまだ出そうもない。しかし、これからも自己研鑽を積むことによって、授業でより効果的な「仕掛け」を行えるように心がけていきたい。

濱田 賢治

KENJI HAMADA

大阪府生まれ。府立高校英語教諭として約30年勤務。大阪府国際教育研究会事務局長、大阪高等学校体育連盟卓球専門部副委員長などを務める。元大阪府立学校指導教諭。趣味はMLB鑑賞。現在、大阪府立天王寺高校勤務。



発信力を高める授業を目指して

大分県立竹田高等学校 高橋 売一

使用教科書:Vision Quest English Expression II

単位数:2単位

使用副教材:Vision Quest 総合英語

使用機器:デジタル教科書, 書画カメラ

はじめに

竹田高校は大分県の南西部に位置する、1学年4クラスの普通科高校である。創立118年目を迎える伝統校ではあるが、急速に進む少子高齢化という厳しい現状の中、多様な学力を持つ生徒を迎えていている。

現在の教育課程となった2013年度を機に、発進力を高める英語の授業を目指してきた。とりわけスピーキング力の養成に力を注いでいる。「コミュニケーション英語」「英語表現」とともに、スピーキング力を育む機会を授業内で用意している。

本稿では、Vision Quest English Expression II(以下、VQ EE IIとする。)を用いた発進力を高めるための授業の工夫について触れたい。特にVQ EE IIのPart 1の授業展開の例を挙げながら教科書の活用法について述べていきたいと思う。本稿では、1課を2時間で行う際の指導例を紹介する。

ハンドアウトで授業の目標を確認!

本校で行われるすべての英語の授業は、授業時に配布するハンドアウトをもとに進められる。英語表現の授業でもB4サイズのハンドアウトが毎回配布される。英語で授業を行うことが求められているが、ハンドアウト内で諸活動を英語で指示しておくと、英語を用いた授業展開も容易になる。生徒にとってはその日の授業の目標が明確になるという利点もある。「授業前と授業後で自分の進歩が確認できる授業」を心がけている。

Lesson 20 **否定を表す** インターネットの問題点
Do you often use the Internet? Do you think the Internet is essential for your life?
As you know, there are several problems of using the Internet.

Task 1 Speak It Out: Talk about demerits of using the Internet with your partner.

Task 2 Listen to the CD to grasp the outline of the passage. You can take notes.

Task 3 Circle T for true, F for false.
1 T / F 2 T / F 3 T / F
..... Fold Here.

Task 4 Read and understand the passage.

1) Vocabulary

安全な	secure (safe より堅い語)
必ずしも~とは限らない	not always (部分否定)
全てが~とは限らない	not every (部分否定)
Aに病みつきになっている	be addicted to A
したがって	thus
を無視する	ignore

2) Passage (否定語は太字になっています。)

より便利なものはない	There is nothing more convenient
インターネットよりも	than the Internet.
(それは) ほぼ不可能だ	It's almost impossible
それなしの生活を想像することは	to imagine life without it.
しかししながら、	However,
インターネットは問題がないわけではない	the Internet is not without problems.
最初に、	First,
それは必ずしも安全ではない	it's not always secure.
全てのインターネット利用者がいい人である	Not every Internet user is a good person.
とは限らない	
2番目に、	Second,
我々はしばしばそれに時間を浪費する	we often waste time on it.
何人かの人々はオンラインゲームに病みつきだ	Some people are addicted to online games.
従って、	Thus,
我々はインターネットで使うことの問題点を無視できない	we can't ignore the problems of using the Internet.

Task 5 Dictation

1
2
3

Task 6 Study Points

A 全否定 no+名詞, no-で始まる代名詞:「1つ(1人)も~ない」

1 週末の予定はない。	I have _____ for the weekend. = I don't have any plans for the weekend.
2 誰も私の計画を支持しなかった。	_____ supported my plan.
3 この自転車もヘッドライトが点いていなかった。	the bicycles had _____ headlights.

B 部分否定 not + 「常時、全体、完全」を表す語:「必ずしも~とは限らない」

4 新聞が必ずしも真実を報道するとは限らない。	Newspapers _____ report the truth.
5 その俳優はインタビューの質問にすべて答えたわけではない。	The actor did not answer _____ the interviewer's questions.
6 姉妹の両方を知っているわけではない。	I don't know _____ of the sisters.

C 準否定 「ほとんど~ない」

7 その理論を理解している者はほとんどない。	Very _____ people understand the theory.
8 彼は私の忠告にはほとんど注意を払わなかった。	He paid _____ attention to my advice.
9 とてもハラハラする試合だったので、ほとんどじっと座っていられなかった。	The game was so exciting that I could _____ sit still.

Expressions

1 私の妹は、もはやサンタクロースの存在を信じてはいません。
My sister _____ believes in Santa Claus. = My sister **doesn't** believe in Santa Claus **any longer**.

2 この計画は完璧というにはほど遠い。
This plan is _____ perfect. = This plan is **anything but** perfect. This plan is **not** perfect at all.

Check!

どの生徒もその部屋への入室は許されていない。(正しいものを選びなさい。)

① Any students are not allowed to enter the room.
② Not any students are allowed to enter the room.
③ No student are allowed to enter the room.

*noのような否定語が否定する力の及ぶ範囲は、原則として「否定語から文の右側、普通は文や節の終わりまで。」

Today's Goal Put into English. まず、部分否定箇所に下線を引こう。

インターネットはいくつか問題を引き起こすことがある。第一にインターネットは必ずしも安全というわけではない。ネット犯罪の犠牲者になる人もいる。第二にインターネット上の情報は完全に信用できるわけではない。インターネット上には誤った情報が存在し得る。最後にインターネットにはまり込んでしまう利用者がいる。彼らはネットサーフィンやオンラインゲームをすることに時間を費やし過ぎてしまう。

Part 1 Lesson 20 Exercises (p.63)

1. 冷蔵庫には食べ物が何も残っていなかった。
 () in the fridge.
2. すべての生徒が部活をするわけではない。
 Not ().
3. 私はこれらの小説のどれも読んだことがない。
 I ().
4. 両方の辞書が必要だというわけではない。
 You ().
2. もうと大きな声で話していただけませんか。ほとんど聞こえません。
 Could you speak louder? _____ you.
2. 彼に何が起きたのか誰も知らない。
 No _____ to him.
3. 彼の説明は真実からほど遠い。
 His explanation _____.
4. あなたたちはもう子どもではないことを認識しなければいけない。
 You have to realize that _____.
- You have to realize that _____.
- You have to realize that _____.
3. 私はEメールのない生活を想像することができない。
 2. すべての生徒が自分のコンピューターを持っているわけではない。(2通りで)
 3. インターネット上の情報がいつも信頼できるとは限らない。
 4. 自分のコンピューターのセキュリティにはほとんど注意を払わない人もいる。
 5. インターネットの危険性を十分に理解している生徒はほとんどいなかった。

GOAL! インターネットの問題点について、あなたの考えを60語程度の英文で書いてみよう。

生徒の解答例 I think the problem of the Internet is that you can write anything on the Internet without showing your real name. Some people might speak ill of others because nobody will know it is them. Others might deceive others and get a lot of money from them illegally. That is, it is important to reconsider whether what you do is good or bad.

添削例 I think the problem of the Internet is that anyone can write anything on the Internet without showing their real name. Some people might speak ill of you; what's worse, Others might deceive you and get a lot of money from you illegally. Therefore, when you use the Internet, it is important to be aware of its dangers. (57words)

コメント

- 人称を表す表現が混亂している！インターネットで被害を受ける可能性がある人を you ネットの向こうにいる正体がわからない人を some people や others などまとめた方がより理解しやすいです。
- 最後の文はあまりに唐突な内容で結論文になっていない。結論文はそのパラグラフで述べられている内容について改めてまとめるものであって、パラグラフで述べられている内容よりもはるかに一般化した内容を結論文にしない。また that is は同格を示すつなぎ言葉でここでは不可。

Excellent Good Try harder!

2-() No. () Name ()

“What are the good points and the bad points about school uniforms?” というトピックで生徒は意見交換を行う。生徒がペアで意見を交わしている間に教師は下記のような英文を板書する。

I'm for school uniforms because there are several good points. First of all, we don't have to worry about what to wear every morning. Also, we don't need money to buy clothes for school. Finally, I love the design of our school's uniforms. It makes me happy.

I'm against school uniforms because we cannot express our individuality by wearing the same design uniforms.

言葉に詰まつた生徒はこれをヒントに会話を続ける。1年次は洋楽1曲を教室で流しながら、この活動を行った。英語で話す雰囲気づくりという狙いと、楽曲の音量に負けない、大きな声でのコミュニケーションを求めるからである。スピーキング活動が定着した2年次には音楽を流すという演出がなくても大きな声で話せるようになった。

5分間ほどペアで話したのち、板書の英文を全員で音読する。以上が授業開始時のウォームアップになる。Part 1が終了し、Part 2、Part 3になってもこの活動は続く。入学時から継続することで、わずか5分の活動でも3年間継続するとかなりの時間、英語を話したことになる。

Speak It Out! のあと、生徒は一旦ペアを解消し、個人でモデル文のリスニング(Task 2, 3)を始める。内容のT/F Questionsに答えるためにメモを取りつつ2回モデル文を聞く。そして T/F Questionsに答えたのち、再びペアで解答を確認し合う。正解は伝えないまま、モデル文の内容把握に移行する(Task 4)。また、Teacher's Manual付属CD-ROMにある、コミュニケーション英語でも使用しているセンスグループ(意味のまとまり)ごとのシート(「モデル文_速訳シート」)も使用する。

授業の始まりは Speak it Out!**《1時間目》**

さて、英語表現の授業の始まりは常に Speak it Out! (Task 1)という活動で始まる。VQ EE II のPart 1では、20のレッスンが用意され、各レッスンにモデル文が付いている。このモデル文に関連したトピックで生徒はペアになり英語で話す。例えば、Part 1 Lesson 13では、

私の学校では	In my school,
生徒達は制服を着なければならない	students have to wear a uniform,
しかし彼らにはそれについて異なる意見がある	but they have different opinions about it.
彼らのうちの何人かはそれに反対している	Some of them are against it
その退屈なデザインのために	because of the boring design.
彼らは思っていない	They don't think
彼らが自分たち自身の個性を表現できるとは	that they can express their individuality
彼らがそれを身につけているとき	when they wear it.
他の生徒達は言う	Other students say
その制服は彼らに一体感を与えると	that the uniform gives them a sense of unity
あるいはそれは経済的だと(言う)	or that it is economical
なぜならば彼らは多くの服を買う必要がないからだ	because they do not need to buy many clothes.

Teacher's Manual付属CD-ROM「モデル文_速訳シート」

上記シートを使って音読練習をしながら内容理解も同時に進行。この活動の生徒のゴールは、日本語を見ながらモデル文の英語を再生することである。(シートでは必ず左に日本文、右に英文が来るよう配置している。)ハンドアウトの最後には60語程度の英作文があるので、これを短時間で作成するための血肉となる活動といえよう。音読練習をしながら未知の語彙も理解していく。

ここでようやく、先ほどのT/F Questionsの解答を確認することになる。ただし、すぐには正解を言わない。生徒が行うのはT/F Questionsで使われた3つの英文のディクテーション(Task 5)である。CDを用いて、英文が流れたらあと、5秒後に英文を書いてよいと指示を出す。生徒の短期記憶を高めるための手立てである。3つの英文をこのようにして書いたのち、再びペアで英文を確認し合う。正解を板書しながら、T/F Questionsの答えの根拠を生徒と確認し合う。

ここまで活動を振り返ってみよう。まず、生徒はスピーキング活動(Task 1)で授業を始め、リスニング活動をしながらノートテイキング(Task 2, 3)を行い、その後、音読シートを使ってリーディング活動(Task 4)を行った。それから、リスニングとライティングを融合させたディクテーション(Task 5)を行ったことになる。多く

の活動を詰め込んだ状態だが、合間にペアでの確認を挟むことで、生徒は孤立した感覚を持たずに各種タスクをこなすことになる。家庭学習ではできないことの1つである「ペア学習」の力は大きい。

授業はまだまだ続く。Study Points, Expressions, Check! の英文を部分英訳の形で行う活動(Task 6)に突入する。文法の説明はハンドアウト内に簡単に示してある。生徒はハンドアウト上で下線が施された箇所に英語を入れていく。

1) 父は数日間、出張で家にいない。
＊「数日間 = 2,3日間」→「継続」→「現在完了」

My father _____ away _____
_____.

2) もう1つすが必要です。ほかの部屋から持つてきます。＊「もう1つの」「ほかの」

We need _____. I'll go and get one from _____ rooms.

ここでも数問解いたのち、ペアで確認させる。例に示したLesson 13では、「豊かな内容の英文を作るために修飾語を加えるスキルを身につけること」を英文作成上の目標としているので、その点に触れながら生徒から解答を引き出していく。多様な表現が可能な英語の教科としての魅力を体感できる活動だ。生徒は挙手もせずに座席から各自、思いついた英語を口にする。

さて、授業が残り5分になったとき、再び、Speak It Out! のテーマについてペアをつくり、「制服の是非」について語らせる。授業の開始時と比べてバラエティに富んだ表現があちこちから飛び交う。50分の授業の成果を生徒も教師も実感できる瞬間だ。授業が終ったあとに、彼らの頭の中に残ったのは日本語ではなく英語であるはずだ。

英作文作成で終わらせない工夫 《2時間目》

2時間目の目標は、1時間目の宿題として作成してきた60語程度の英作文を共有することである。そのため、教科書Exercisesの英文は「瞬間英作文」と捉え、瞬時に日本語から英語に転換するトレーニングとして扱う。1時間終わらせるごとに、「ではこの表現はどう言う?」と生徒に問いかけるようにしている。例えば、まず、【Exercises 2】5. 昨日のサッカーの試合は、私がこれまで見た中で

最もハラハラする試合だった。→ Yesterday's soccer game was the most exciting one I've ever seen.を確認したのち、次のように生徒とやり取りをする。

Teacher: OK. Put into English the following Japanese as fast as possible. そのニュースは、私がこれまで読んだ中で最も驚くべきものだった。

Students: The news was the most surprising one I've ever read.

Teacher: OK. Let's move on to the next question.

Exercises の14~15文に加え、「瞬間英作文」で30文ほどの和文英訳を済ませたら、宿題のグループ内吟味に入る。4人組のグループをつくり、自分以外の3人の作品を読む。自分の作品を相手に読み聞かせ、聞いた相手は短いコメントを述べる。これを相互に繰り返すことで多様な表現を知る機会にもなるし、文法的なミスや正しい語彙の選択にも目が向けられるようになる。

グループでの作業が終わる頃、書画カメラを用いて生徒作品の1点を全体に紹介し、全員で添削する。添削した文を全員で音読して2時間目の授業は終了する。

ALTとのTeam Teachingで実践

英語表現Ⅱの単位数は2単位だが、コミュニケーション英語Ⅱの単位数は4単位ある。コミュニケーション英語Ⅱの4単位のうちの1単位はALTとのTeam Teachingとしている。ここでは、コミュニケーション英語Ⅱで学んだこと、英語表現Ⅱで学んだことを実践する時間と位置づけ、プレゼンテーション、問題解決型学習、ミニディベート、ディスカッションといった活動に取り組んでいる。

上記の内容はVQ EEⅡではPart 3で扱う内容だが、既に1年生の4月から挑戦させている。最初はつたない英語でのやり取りだったディベートも、回を重ねるうちに進歩の跡が見られる。

そのほかの工夫

授業と評価の一体化は大切だ。そこでスピーキングテストなどのパフォーマンステストも定期考査前に行っている。また、ペーパーテスト内でも自由英作文を出題している。

コミュニケーション英語の授業も英語表現の授業も基本的に授業内で行う活動は、ほぼ同じ形態にしている。そのため、コミュニケーション英語の教科書は易しめの教科書を選んでいる。生徒は両者の科目の違いをあまり意識せずに学習しているはずだ。両方の授業とも

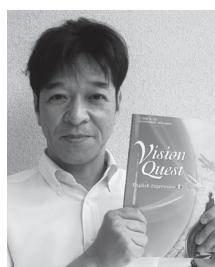
4技能をできるだけタスクに盛り込み、発進力を高めるための授業展開を心がけている。

周囲に塾や予備校がないことから、学校での英語学習が生徒にとっての拠り所である。英検などの外部検定試験受験とそのための対策講座にも力を注いでいる。

おわりに

本校は私の母校である。いつの日か母校の英語教師として英語を教えたいという夢が叶って8年目を迎えた。過疎の田舎町において高校生の存在は「地方の宝」である。恵まれているとはいえない教育環境の中で、生徒達はこの学舎で夢を追い続けている。かわいい後輩達の夢を後押ししたいとできる限りの工夫をしている最中だ。

「グローバル化」が叫ばれているが、将来、海外勤務をしたり、外資系企業で働いたりする子はほんのひと握りであろう。地方で働きながらも英語で外国人とコミュニケーションを取ることに喜びを見出し、異文化理解で心を彈ませる人材を育成できればと願っている。どんな仕事に就いたとしても、自分の住む場所と世界をつなげながら思考し、行動する人であってほしいと願っている。今、VQ EEⅡを用いて行っている授業がそんな彼らにとってのstepping stoneとなってほしい。



高橋 憲一

KENICHI TAKAHASHI

1965年生まれ。立命館大学文学部文学科英米文学専攻卒業。教職員歴28年目。山岳部顧問。現在、3学年主任。

启林館

<http://www.shinko-keirin.co.jp/>

201506

本 社 〒543-0052 大阪市天王寺区大道4丁目3番25号

東京支社 〒113-0023 東京都文京区向丘2丁目3番10号

札幌支社 〒003-0005 札幌市白石区東札幌5条2丁目6番1号

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1丁目4番34号双栄ビル2階

広島支社 〒732-0052 広島市東区光町1丁目7番11号広島C Dビル5階

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院1丁目5番6号ハイヒルズビル5階

TEL(06)6779-1531 FAX(06)6779-5011

TEL(03)3814-2151 FAX(03)3814-2159

TEL(011)842-8595 FAX(011)842-8594

TEL(052)935-2585 FAX(052)936-4541

TEL(082)261-7246 FAX(082)261-5400

TEL(092)725-6677 FAX(092)725-6680